

情報発信型コミュニケーション能力の育成

小沼俊男

Improving Communication Abilities to
Provide Information

Toshio KONUMA

はじめに

いま、ビジネス社会が求めている能力で最も重視しているのが、言葉によるコミュニケーション能力である。企業の人事担当者は、新採用者研修の重点を実務におき、短期間の研修で効果をあげるようにしているが、コミュニケーション能力については短期間の教育で成果をあげることが難しく、実務を行いながら、現場で補助的に教育を進めているのが実状である。

したがって、採用の時点で、受験者が分野や年齢の異なる人達と円滑なコミュニケーションを図ることができる人材かどうか重点をおいて審査している。

さらに、ビジネス社会の一員となってからは、より精度の高いコミュニケーション能力が要求される。相手に対する確かな説明や報告をする力、目標に向かうチームの一人として、意志の疎通を図り、自らの考えを提案したり、高いプレゼンテーション能力を身につけ受注に結びつける力、交渉の場でも、相手の納得を得る表現能力が求められるのである。

このようなコミュニケーション能力は、相手の立場に立って物事を考える他者意識が備わっていることが前提となる。相手が求めている情報、ウォンツは何かを正確に掴み、相手の要求

に応える双方向型のコミュニケーション能力である。

いま、教育現場でも、子ども、教師、保護者との関りの中で、相手の考えを受け止め、問題を共有し、共に考え、問題解決を図る能力が要求されている。

このような社会の要請に応えるためには、大学教育の中で、その基礎を身につけるために、知識としてではなく、実際に声の言葉として習得する体験が必要であることは言うまでもない。基礎教育として必要なことは、コミュニケーションの土台となる言葉を、書き言葉としてではなく、声の言葉として身につけようとするかどうか、また、その前提となる他者意識をどのように言葉に表すのかを考え実践しなければならない。

I 情報発信の基本トレーニング その一

1. パブリック・スピーキングの基礎

教育の前提を公的な場での情報発信とし、私的な雑談とは区別する。公的な場の表現は、説明、報告、交渉、ディスカッションなど、それぞれ目的があり、一定の内容を、一定の時間内に筋道立てて話すという条件がある。パブリック・スピーキングは、この条件のもとに「何を」「どう」伝えるか話の組み立てを考える。

「何を」話すかの組み立て

説明や報告をする前に話の柱立てをする。どのような場・立場で、誰に、何のために、何を伝えるのかを考え、情報を取捨選択する。

「どう」話すかの組み立て

実際に声に表すときに考える。

《明快な筋道の立て方》

- ①全体から部分へ(結論は先, 理由はあと)の話体構造にする。
- ②項目に分け見出しをつける
- ③1センテンス1情報で伝える
- ④事実と意見を区分けする
- ⑤具体的に話す

《音声言語としての聞きやすい表現》

- ①発声・発音・速さ・間を考える
- ②自然体で話す

授業における実践では、上記をパブリック・スピーキングの基礎を学ぶトレーニングポイントとして、実践課題を通して学習する。

2. 音の言葉の特徴を知る

授業の第一ステップは、話し言葉と書き言葉を区別するところからはじまる。なぜ、音の言葉として確認しなければならないのか、とまどう人が多い。書き言葉でも話し言葉でも、どちらでもそう変わらないのではないかという疑問を抱く。しかし、書き言葉は、読み返すことで確かめられるが、音の言葉は瞬時に消えてしまうという特徴がある。聞き手は耳に届く順序でしか理解する手段を持たない。

したがって、聞き手の立場から声の言葉を考えて組み立てる必要が出てくる。

3. 表現を分かりやすくする

ある人が自己紹介をはじめた。「私は小さい頃から料理が好きで、煮物、揚げ物、焼き物などを母親から学び、学生時代はイタリアとフラ

ンスに留学し、帰国後、全日本料理コンクールで優勝した…」と話が進む。ここまでは誰が聞いても、料理が得意なのは話し手自身だと思う。ところがそのあと「(帰国後全日本料理コンクールで優勝した)先輩を知っています。」と、最後に来てはじめて、料理が得意なのは先輩であることが分かる。

授業では、このような誤解を生まないために上記の自己紹介をどのように組み立て直したらいいのかを考えてもらう。

修正の例として多いのが「私の先輩は小さい頃から料理が好きで、煮物、揚げ物、焼き物などを母親から学び、学生時代はイタリアとフランスに留学し、帰国後、全日本料理コンクールで優勝しています」という組み立てである。

誤解を生じる組み立ては回避されたが、分かりにくい。まだ耳で聞いて分かる言葉のまとまりに整理されていない。

内容を項目に分けてみると

- ①先輩は小さい頃から料理が好きだった。
 - ②煮物、揚げ物、焼き物などを母親から学んだ。
 - ③学生時代はイタリアとフランスに留学した。
 - ④帰国後、全日本料理コンクールで優勝した。
- と四つになる。これだけの項目が、切れ目なく伝達されると、瞬時に全部を理解できない。初めから終わりまで、文章で言うと「。」のない声の言葉は、分かりにくい。そこで、言葉のまとまりとして聞き手にとって理解しながら記憶できる言葉の長さ(時間)を考える。

これは、人間が一息で話せる時間と関係がある。学生に質問する。「話をするときや文章を読むときに、一息で伝えられる時間はどのくらいだと思うか」と聞くと、比較的多いのが10秒から15秒、次に30秒、1分、いや3分は話せるという答えが返ってくる。

ここで、先ほどの自己紹介の文章を読んでもらう。「私の先輩は小さい頃から料理が好きで、煮物、揚げ物、焼き物などを母親から学び、学生時代はイタリアとフランスに留学し、帰国後、全日本料理コンクールで優勝しています」。この文章は普通の速さで読んで標準は15秒ほど

の文字数である。読むときに息をためて長く読もうとせず、ごく自然に読んでもらう。結果は読み始めの息も含めて3回～4回息継ぎをしている。読み手は、4秒から5秒ごとに息を吸っていることになる。

言葉のまとまりと人間の息の長さから言えることは、一息の長さ4秒～5秒で「。」がくるようにおさめると、伝える側にとって無理がかからないのと、聞く側にとっても言葉のまとまりというボールをしっかり受け止めることができる。一般的に、日本人はセンテンスが長い。印象としてはダラダラとした話し方が蔓延している。こうしたメカニズムを理解したうえで、分かりやすく話すことの基本は「1センテンス1情報」で伝えると聞き手にとって分かりやすい話し方になることを習得する。

4, 筋道立てて話す～全体から部分へ～

日本人の話し方で批判を浴びるのは、「最後まで聞かないと話者の考え方が掴めない」ということである。次のステップは、何を言いたいのかが早い段階で聞き手に伝わる「話体構造」を理解するために、課題をもとに実践を積み重ねる。実践課題は指導者が作成する。道順の説明から、自治体広報・教育講座の周知・交通機関の情報、伝言、会議や交渉の報告など、出来るだけ身近な素材から、筋道立てて話す構造が理解できる内容の課題をつくる。これらの課題を通して学ぶことは、伝える目的、対象、場、話し手の立場をはっきりさせ、何を伝えるのかを明確にする組み立てである。

トレーニング：図書館の行事予定を説明する

表-1は、図書館の行事予定である。電話での問い合わせに、表の内容を過不足なく分かりやすく伝えるための課題の一つである。

電話をかけてきた人は、いい行事があれば子どもと一緒に参加したいと考えている。

第一段階は、自由に説明してもらう。相手はこの表を見ていないことを前提に声だけで伝える。多くの学生は表-1の内容を次の様に説明する。

「まず、24日(月)には14時から16時までアニメ上映会。10時から12時まで絵本の読み聞かせ会があります。25日(火)は、14時から16時までアニメ上映会。10時から12時まで絵本の読み聞かせ会。14時から17時まで親子劇場5月公演があります」と開催日順に上から読み上げる。聞き手は、行事によっては何度も同じ行事名や時間を聞かなければならないこと、最後まで行事の全貌がつかめないなどの難点がある。聞き手に理解してもらうために、どのように組み立てたらいいのかを、表-2を参考にしながら考えてもらう。

説明の基本は、全体から部分への話体構造をつくることである。

図書館の行事予定 (表-1)

5 月	24日(月)	25日(火)	26日(水)	27日(木)	28日(金)
アニメ上映会	14～16	14～16			
おはなし会			13～15		
絵本の読み聞かせ会	10～12	10～12	10～12	10～12	10～12
手遊び教室 対象・3歳児				10～11	10～11
親子劇場5月公演		※14～17			

※会員のみ

全体から部分への組み立て方 (表-2)

全体	<ul style="list-style-type: none"> ■件名 何についての話か ●全体像(結論) 内容をひとことと言う
部分	項目① 項目①の全体像(小見出し) 内容説明
	項目② 項目②の全体像(小見出し) 内容説明
	項目③ 項目③の全体像(小見出し) 内容説明

まず説明の内容を全体と部分に分ける。全体の中には「件名」と「全体像」を組み込む。部分の説明は項目に分け、それぞれに小見出しをつける。先ほどの学生の説明は、「全体」のところ、何について伝えるのかの件名、伝える内容の全体像がない。いきなり部分の説明に入っている。重要なことは、部分の説明に入る前に伝えるべき情報は何かを考えることにある。

件名・全体像の組み立て

件名と全体像を考えた説明を求めると、ほとんどの学生は次のように説明する。

「これから5月24日(月)から28日(金)までの図書館の行事予定をお伝えします。この期間には5つの行事があります。」と組み立てる。

通常はこれでも理解はできるが、あえて件名と全体像の区別を考えてもらう。件名は「～について」と、伝えることのタイトルとして位置づける。全体像は、話す内容の大枠である。件名は、「図書館の行事について」、全体像は表の横軸である「行事の期間」と縦軸の「行事数」を組み込む。そのうえで、電話で話すように説明する。

「図書館の行事予定についてお伝えします。」
「これからお伝えするのは、5月24日(月)から28日(金)までの行事予定です。この期間には5つの行事があります。(行事名を入れてもよい)」

冒頭での学生の説明「これから5月24日(月)から28日(金)までの図書館の行事予定をお伝えします。この期間には5つの行事があります。」は、

件名と全体像の区別ができていないことがわかる。整理ができたところで「部分」としての表の説明の組み立てに入る。

部分の説明で多い例は、上から順番に行事ごとに説明するか、曜日別に説明する。この表を持っていない相手は声だけの説明から情報を得るため、表の上から行事ごとに説明されると、曜日が前後する。先程の例のように曜日順にすると同じ行事でも曜日ごとに何度も聞くことになり煩雑になる。ここでは聞き手にとって理解しやすい順序を考える。実践では、検討を4人～5人のグループで行い、検討結果を発表してもらおう。

部分の組み立ては、行事、開催日時、参加条件など情報の括り方と伝える順序が分かりやすさの決め手になる。グループの検討が進むと、大勢は、部分を「毎日の行事」「開催日時の早い順」「会員のみ」に括り、この順で伝える組み立てになる。今回の課題は、この三つの括りの項目が部分の全体像になる。グループごとの発表事例を点検すると…

部分の説明 (1)

実践者：「まず、24日(月)から28日(金)まで午前10時から12時まで絵本の読み聞かせ会が行われます」

点検：利用者が知りたい順番は、「何が行われるのか」が分かってから、次に「それはいつなのか」になる。いきなり日時から入っている。利用者が知りたい順と説明者との間にズレがある。

改善：「絵本の読み聞かせ会は、24日(月)から28日(金)まで午前10時から12時まで行われます。」

部分の説明 (2)

実践者：「はじめに、絵本の読み聞かせ会が24日(月)から28日(金)まで、午前10時から12時まで行われます。次に、アニメ上映会が、24日(月)と25日(火)午後2時から4時まで開催されます。次に、おはなし

会が26日(水)午後1時から午後3時まで行われます。(中略)最後に親子劇場5月公演が、25日(火)午後2時から5時まで行われます。

点 検：開催日時の早い順に説明をする分かりやすい組み立てになったが、「毎日行われる…」「開催日の早い順に…」「会員を対象に…」など部分の全体像(小見出し)がないために、その意図が伝わらない。

改 善：「はじめに、毎日行われる行事からお伝えします。絵本の読み聞かせ会が24日(月)から28日(金)まで、午前10時から12時まで行われます。次に、開催日の早い順にお伝えします。アニメ上映会が、24日(月)と25日(火)午後2時から4時まで開催されます。次の行事は、おはなし会です。26日(水)午後1時から午後3時まで開かれます。

(中略)

最後に会員を対象にした行事をお伝えします。親子劇場5月公演が、25日(火)午後2時から5時まで行われます。

()は部分の全体像)

行事予定の部分の組み立てができたところで、完成させた全体の説明内容を確認する。

「図書館の行事予定」の説明(一例)

(件 名) それでは図書館の行事予定についてお伝えします。

(全体像) これからお伝えするのは、5月24日(月)から28日(金)までの行事です。この期間には5つの行事があります。

(部 分) はじめに、毎日行われる行事からお伝えします。絵本の読み聞かせ会が24日(月)から28日(金)の期間、午前10時から12時まで行われます。次に、開催日の早い順にお伝えします。アニメ上映会が、24日(月)と25日(火)午後2時から4時まで開催されます。次はおはなし会です。開催日は、26日(水)午後1時から3時までです。次の行

事は手遊び教室です。対象は3歳児です。27日(木)と28日(金)午前10時から午前11時まで開かれます。

最後に会員を対象にした行事をお伝えします。親子劇場5月公演が、25日(火)午後2時から5時まで行われます。以上です。よろしくお伝えいたします。

実践を通して学ぶこと

授業では、相手の立場に立って分かりやすく情報を伝える基本を習得するために、今回の図書館の行事予定をはじめ、図形や文章課題などに取り組む。何れも相手にとって理解しやすい話の組み立て方として、全体から部分への発想を持ち、情報を伝えはじめたときに伝えることの全体を聞き手が把握できるようにすること、部分に入ってから、聞き手が知りたい順序を考え、項目に分け見出しをつける、1センテンス1情報で伝えるトレーニングを繰り返す。

分かりにくいと言われる話し方は、部分から部分へ、見出しのない話が進み、何を言いたいのかが最後まで分からない場合である。結論先行型「主情報が先、補助情報は後」の理解を深める。実践では、常に組み立てと音声の両面から音の言葉としての分かりやすさ、聞きやすさを点検し論理的な話し方を身につけられるようにしている。

II 情報発信の基本トレーニング その二

情報発信型コミュニケーション能力育成を目的とするトレーニングの次の段階は、「テーマの絞り込み」「具体的に話す」「事実と意見を区分けして話す」ことを身につける実践に入る。

課題を「実習を通して得たこと、学んだこと」として、一人3分報告する。

授業では事前に、次の配布資料をもとに、組み立て方の説明と確認をする。

実践のねらいは、全体から部分への組み立て

の習得を確実にするため、全体像となる主題をひと言で表現すること、話の中心はその根拠となるエピソードを目に浮かぶように、事実を積み重ねて伝える表現力を磨くことにある。

報告する内容は、多項目に亘るのではなく、出来るだけ中心になる話材を掘り起こし、一つのテーマを一つの事実で組み立てるように指導する。

(配布資料)

実習報告課題

実習を通して得たこと、学んだこと
(3分以内)

1. 実習で得たことの全体像をひと言で言う。
2. 全体像の裏付けとなる実習の内容をエピソードを組み込み、具体的に、事実と意見を区分けして話す。

《実習報告の中心を決める》

下記の中から一つを選んで組み立てる

- ①絵本や童話を読む試み
読んだ作品、工夫したこと、子どもの反応
- ②保育の内容で難しかったこと
例) 子どものトラブル対応
- ③先輩の先生の助言・保育・授業の観察
- ④実習生としての試み
- ⑤諸活動の中での子どもの豊かなことば

3. まとめのひと言
話し手の意見・主張

上記の報告課題の実践に当たっては、構想を練る段階で3つのポイントを押さえる。

1. 筋道立てて話す論理表現の手法を、実習報告で応用する。2. 全体像となるテーマ自体を具体的に表現したうえで、そのことをどのような事実で言い表すのかを考える。3. 事実を

聞き手が理解できるレベルまでの具体表現にするために、実習内容を掘り起こす。

以上のポイントについて推敲し組み立てたあと報告の実践は2つのステップを踏む。

第一ステップは、一人ひとり全員の前で報告する。報告が終わったところで、全体像の有無、具体事例のレベル、まとめの内容等について指導する。

第二ステップは、第一ステップの指摘をもとに報告内容を修正しレポート用紙に記述して提出する。

実習報告には123名が参加している。はじめに第一ステップの全体傾向を二つの報告事例で見る。報告内容は主題に対する事例が抽象的であるため、具体的にどのようなことがあったのかが分からないケースが多い。

実践事例 (1)

「実習を通して私は保育者の子どもへの声かけについて学ぶことができました。

実習中に悩んだことは、子どもへの声かけでした。積極的に話しかけてくる子、逆に声をかけても黙っていて口を閉ざしている子などさまざまです。どの子どもにも声をかけ話をしたい、関わりたいと思っていますが思うようになりません。特に話をしない子にどう接していいかよく分からず悩んでいました。ところが、先生は、私とは話さない子でも、活発に話しているのです。その様子をよく見ていると、先生は子どもの目線で声をかけ、子どもと話のキャチボールをしているのです。ひと言ひと言が子どもをとらえていました。それからは、私も先生から学んだ子どもの目線で声をかけるようにしていますが、子どもの緊張を解き、本当の意味で子どもの目線で話をしたり、子どもの話を聞くことができるようになるには、もっと経験を積まなければなりません。今回は、声かけのもつ深さを実感できた貴重な実習になりました。

実践事例 (1) 指導のポイント

実習報告としてのテーマの選択はよい。ここ

での改善点は、まず、テーマを「子どもの声かけについて」から一歩踏み込んで「子どもの目線で声かけをすることの大切さ」として言いたい事をはっきりさせるとよい。そのうえで、この全体像を裏付ける具体事例を掘り起こす。具体性というところまで言えばいいのかのとらえ方が報告者によってまちまちである。学生にはヒントとして「そのときの状況が目浮かぶように話すこと」と伝えているが、そのレベルの一手手前で終わる場合が多い。この事例の第2ステップの学生の課題は、先生が子どもの目線でどのような言葉で声かけをしていたのか、ひと言ひと言が子どもをとらえていたというその「ひと言ひと言」を具体的に表現すること、また、それに対する子どもの反応を子どもが発信した言葉で伝えるようにすることである。

実践事例 (2)

「設定保育は、子どもの反応を考えた指導案づくりが必要である」ことを学びました。

設定保育を、子どもにとって意味のある内容にするためには、保育士の都合で、一方的に考えるのではなく子どもの反応をイメージした指導案をつくらなければなりません。いろいろ考えているときに、指導していただいている先生の保育の実際を観察する機会がありました。

先生が準備した教材を使い、活動が始まると、子どもたちは、自分の好きな教材を手にとって個性的な取り組みをしていました。先生は子ども一人ひとりに合った援助を行い、保育室は活気に溢れていました。終了後先生に準備の仕方について聞いてみました。先生は、まず、準備するときには、子どもがどのように反応するか、一人ひとりの子どもの顔を思い浮かべながら考えること、子どもが積極的に参加してくるかどうか、子どもの動きを見通すことが大切であるという話をしてくれました。納得する話でした。

4月からいよいよ現場に立ちます。先生が見せてくれた保育を私が試み、力をつけていきたいと思っています。

実践事例 (2) 指導のポイント

設定保育の実施にあたっては、子どもの反応を考えた指導案づくりが必要であることを先生の保育の実際を通して学んだことが分かる。しかし、ここでも、先生がどのような保育を行ったのか、そのときに準備した教材、その活用の仕方、先生の援助の方法など、本人以外は全く分からない。具体的な言葉で表現してほしい。先生の話に納得したと言っているが、聞き手にその内容は伝わらない。第2ステップは、先生の保育内容を聞き手が具体的に描けるように、本人が納得した事実を伝えることが課題となる。

このように第一ステップでは、テーマである全体像の裏付けが抽象的であった。授業実践では上記2例が特例ではなく、全体の傾向として言えることである。第二ステップでは、各自の報告内容に応じた具体事例の掘り起こしを最重点とした。

授業実践では、報告者一人ひとりに対し改善点を伝えていく過程で、未発表の学生は、具体事例の掘り起こし方や報告の仕方のポイントを聞くことができるため、第一ステップの報告はそれ以前に実践した学生にくらべ、報告する内容をより具体的な言葉で組み立てようと努力する。

次の第一と第二ステップの事例は、伝えたい内容がよく分かるように、具体例を積み重ねた表現を考え実践したCさんの報告である。第一ステップでは、報告の内容に(A)と(B)を入れこの部分について、異なる情報をどのように整理したらいいかを検討する。

実践事例 (3) 短期大学部2年Cさん 第一ステップ

「行事を通して子どもが得るものについてお話しします。私の行った園では芋ほり遠足からはじまり、そこで掘った芋を使って芋きんとん作りをするなど、芋に関する行事が組み込まれていました。毎日の保育にこういった行事が入

ると、子どもが生き生きしてくることがよく分かりました。これからお芋のお話とS君という男の子の話をしたと思います。

(A) S君はいつも食事を全く食べなくて、食べられないのではなく食べようとしないう男の子で、毎日担任の先生の膝だっこをして援助をしていて、私自身も、S君にとっては、目の前にお弁当のすべてを食べ終えるのは気の遠いようなことなので、先生が魔法のお箸で4つに分けてあげるねと言って援助をしていきました。

(B) S君が自分で掘った芋きんとんをつくる時は 食事に関して興味を示さなかったのに、作るということで、おいしくなあれ、おいしくなあれといいながら友達と一緒に楽しそうに作っていて、芋きんとんを二つ作ったのですが、二つとも毎日給食は食べないのに、芋きんとんを全部食べて、その姿を見て言葉にできない喜びが沸いてきました。

このように、このS君を通して、芋を自分で掘って、それを料理する経験を与えられる行事の大切さが実感できました。行事もただ楽しいからするのではなく、子どもに新たな発見を期待できる場として活用している保育者の思いと行事の重大さがよく分かりました。私も今後行事の意図を忘れることがないよう取り組んでいきたいと思っています。

実践事例 (3) 第一ステップ指導のポイント

Cさんの報告内容は、事例(1)(2)で見られた抽象表現に比べ、様子をできるだけ具体的に伝えようとしている。Cさんは文章化した原稿ではなくメモを手話した。この試みは、話す力をつけるうえで大変重要なことである。文章にして読むより、聞き手を引きつける。この段階で、次に考えなければならないのは、浮かんだ情報を瞬時に整理することである。具体表現に入ると、どうしても伝えたい項目が多くなる。

(A)を見ると、一つのセンテンスの中にくつつかの内容が入っている。(A)の内容を項

目に分けると

①S君はいつも食事を食べようとしないう男の子も。

②担任の先生は膝だっこをして援助している。

③私も魔法のお箸で…と援助。

ここでは、3項目が一つのセンテンスの中に組み込まれている。それぞれに「。」を入れ、センテンスを分ける方が聞き手にとって分かりやすい。次に(B)の内容を項目に分けると、

①S君が自分で掘った芋きんとんをつくる時は、「おいしくなあれ〜」といいながら作っている。

②友達と一緒に楽しそうに作っている。

③芋きんとんを二つ作った。

④芋きんとんを全部食べた。

⑤その姿を見て言葉に出来ない喜びが沸いてきた。

この項目の中で、「S君が芋きんとんを作っている」「二つ作った」「芋きんとんを全部食べた」ことは事実。「友達と一緒に楽しそうに作っている」と「その姿を見て言葉にできない喜びが沸いてきた」ことは、報告者の意見である。事実と意見が一つのセンテンスの中に入ると、聞き手にとって、それを仕分けして理解することは極めて難しい。情報を伝える場合には、「伝える事柄、場の状況、動き、言動、論理などを話し手が仕分けして伝えたときにはじめて聞き手に伝わる」ということを意識する必要がある。次の第二ステップは、情報発信の基本として学んだ「1センテンス1情報」を当てはめて、事実と意見を区分けした組み立てに修正したものである。

実践事例 (3) 第二ステップ

この2年間の中での実習は、自分にとってたくさんの方の気付きを与えてくれました。今回は、その中でも行事を通して子ども達が成長することを学ぶことができました。

私が行った園では、芋ほり遠足から、その芋を使っただけの芋きんとん作りをしていました。実習が始まり1週間が過ぎようとする時でした。芋きんとんを作っているとき、S君の姿に驚い

たのです。それは、「おいしくなあれ」と友達と一緒に作るSくんです。楽しそうでした。Sくんは、毎日食事を全く食べない子どもでした。食べたくないというのではなく、本当に一口も食べようとすらしないう様子でした。担任の先生も側につき、いつも食べさせるという援助をされていました。Sくんにとっては、いま、目の前にある食事を全て食べるなんて気の遠くなるようなことのように感じました。私も、芋の四分の一だけでも食べてもらうように、「先生がこのお芋を魔法の箸で割って食べやすくしようね」と声かけの工夫をする毎日でした。そんなSくんを見ていたので「おいしくなあれ」と友だちと楽しくつくっている姿に驚いたのです。それから芋きんとんをおいしそうに食べたのです。いつも何も口にしようとしないうSくんが、自分から芋きんとんを食べたことに私は嬉しさでいっぱいになりました。この芋は自分たちで植えて掘った芋です。

きっとSくんは、この経験をしたことで、芋きんとんを食べることに自ら進んでいったのだと思います。

Sくんのように、行事を通して何か感じて成長するということが行事の重要さがわかりました。子どもに新たな発見や期待がもてるような行事をすること、それにこめられた保育者の願いが感じられる出来事でした。私も行事の意図を忘れることのないように、これから先生として取り組んでいきたいと思っています。

実践事例 (3) 第二ステップでの発表者の試み

それぞれ「1センテンス1情報」の原則を考え、センテンスを短くしている。また、全体像のところで、ステップ一と組み立てを変え分かりやすくしている。主題の提示が早い。部分の出だしでは「Sくんの姿に驚いた」ことを伝え、その理由を順次説明している。聞き手を引きつける組み立てを考えた。全体に子どもが変化の様子を事実と意見を区分けしながら伝え、行事を通して行う保育の意図を明確にしている。

今回の実習報告では、第一ステップが終了し

た段階で、受講者123人全員に、改めて各人の実践内容をさらに分かりやすくするために、次のような確認をした。「第二ステップでは、全体から部分への組み立て、また、部分の説明は、失敗、改善の経過、先生の助言や保育・授業の実際を観察したときの様子、子どもの反応などを具体的に表現しようとするこだわりが実感できるように事実を言葉にしてほしい」と伝えた。その結果、「全体から部分」への組み立てができたのは、全体の80%の98人に達している。

しかし、全体像であるテーマ設定が出来ていてもテーマが漠然としていると、部分の掘り起こしに決め手を欠くという傾向が見られる。そこで、最終の報告としては、実践意図を反映させた3人の実習報告をもとに、情報発信のあり方を考察する。

最終報告事例 (1) 短期大学部2年Dさん

私は今回の幼稚園実習を通して、保育者の役割について様々なことを学びました。数え切れない程沢山ありますが、その中で気づかされたのが「自然の豊かさを子ども達に伝えていくこと」です。

実習中には、芋ほり、キウイ狩り、わらの家づくり等園外保育があり、歩いて現地に行くことが沢山ありました。田んぼの方へは何度か散歩に出掛けました。その際、先生は時々足を止め、「みんな、あの山見てごらん。前まで緑色だった山が今はどんな色している？」と言葉かけをしたり、「大きく息を吸ってごらん。空気がおいしいよ」と、自然の中での発見を子ども達に伝え、共感していくことを大事にしていました。

このような保育者の働きかけによって、これまでにただ目的地を目指して歩くだけだった子どもも、「あっ、なんか草のにおいがする」など見えない自然を感じたり、気付いたりする姿が見られるようになってきました。中には田んぼで蛇の抜け殻を見つけて驚く子どももいました。先生は他にも、わらの感触を子ども達に聞いてみたり、芋ほりでは、つるの長さや実の大

きさなどから、サツマイモの生命力を感じてもらったりしていました。

保育者の役割「豊かな自然を子ども達に伝えていくこと」を果たすためには、保育者自身が視野を広げ、自然の小さな変化にも気付いていくことが大切だと思います。子ども達の小さな変化に気付くことにも繋がります。子ども達自身の視野が広がることによって、普段の生活が新鮮で楽しいものになると思います。ビルやマンションの建設等で自然が少なくなってきた中で、自然とふれ合う楽しさを子ども達に伝えていくことは、保育者の役割としてとても大切なことだと実習を通して実感しました。

最終報告事例 (1) 考察

報告者の明快なテーマ設定と観察力

構想の段階をみると、テーマを「保育者の役割」としたが、ここからすぐ部分の説明に入らず、「豊かな自然を子ども達に伝えること」とテーマを絞り込み、「何を」伝えるのかを明確にしている。部分では、下記の様にテーマを裏づける具体的な事実として、先生の声かけ、援助と子どもの反応を掘り起こし整理している。

①園外保育での先生の声かけ、援助

◇「みんな、あの山見てごらん。前まで緑色だった山が今はどんな色している？」

◇「大きく息を吸ってごらん。空気がおいしいよ」

◇わらの感触を子ども達に聞いていた。

◇芋ほりでは、つるの長さや実の大きさを子どもに示していた。

②子どもの反応

◇「あっ、なんか草のにおいがする」

◇蛇の抜け殻を見つけて驚く子ども。

先生、子どもの言動をよく観察しテーマを裏付ける話材として位置づけている。そして、まとめは、観察した具体事例をもとに、保育士としての実践が子どもに与える影響の意味を考え、このことが保育者の役割であることを伝えている。報告の組み立ては「保育者の役割」-「豊かな自然を子ども達に伝えること」-「観

察した具体事例」-「保育者の役割」で起承転結型から、より論旨をはっきりさせる結起承転結型になっている。

全体像を具体的にすることにより結果として何を言いたいかのイメージが明確になり、その根拠となる出来事の掘り起こしができることを示している。

最終報告事例 (2) 短期大学部2年Eさん

私は実習を通してトラブルの対処法の難しさを学びました。

3週間の実習日程の中で私は子ども同士のトラブルに何度もでくわしました。

一つの例ですが、Aちゃんが持っていた動物のお面をBちゃんを取り、Aちゃんにたたかれて泣くという場面の話です。私はBちゃんが泣いているところを見てケンカに気がつきました。私は泣いているBちゃんをだっこし、Aちゃんの手をにぎり、「何があったのか教えて?」と優しく問いかけました。Aちゃんとはぎれとぎれに、「だって…Bちゃんが…」と小さな声で悲しそうに言っています。私は聞き取れず理解できませんでした。Bちゃんは、泣いているAちゃんよりも何を言っているのか、もっと分かりませんでした。お互いの話を聞き、理解したいと思っても出来ず困り果てていると担任の先生がやってきました。担任の先生はAちゃんとBちゃんの両方を抱っこして、「先生にお話をして?」と言い、聞き取りにくい言葉の中でも聞こえた言葉を繰り返しました。何分かこの様な状態が続いていくと、話の内容がつかめてきました。先生はAちゃんが言った言葉をそのままBちゃんに伝え、Bちゃんが言った言葉をそのままAちゃんに伝えました。そして落ち着いてきた子どもに、「どうしたら仲直り出来るかな?」と言いました。するとBちゃんが「お面をつくる」と言い、仲良くお面をつくりはじめました。

私は先生の保育の仕方学んだことは、理解しようとする姿勢が大切で、自分にゆとりをもち、じっくり子どもにぶつかることだと思いました。そして、子どもの言葉の橋渡しをして子

どもに相手の気持ちを伝えることで、伝えてもらう子どもは受容された気持ちになることを学びました。

子どもの気持ちを理解していくのは簡単ではないと思いますが、たくさん子どもに関わり、子どもに寄り添った保育をしていきたいと思いました。

最終報告事例 (2) 考察

注目したいのは、先生が子どもから話を聞き出す場面に報告者が焦点をあてている部分だ。「先生にお話をして?と問い、聞き取りにくい言葉の中でも聞こえた言葉を繰り返しました。何分かこの様な状態が続いていくと、話の内容がつかめてきました」というこの箇所は、カウンセリングやコーチングで活用している積極的傾聴法に共通した方法とも思える先生の援助である。漠然と様子を見ているだけでは気がつかないところだが、先生の子どもへの対応に接した実習生は見事にこの場面を捉え、「理解しようとする姿勢が大切」「伝えてもらう子どもは受容された気持ちになる」「子どもに寄り添った保育を」という表現を生み出している。先生の援助を技術として見たのではなく、保育に必要な援助の構造として理解したことが分かる。

一つのテーマ、一つの事実をもとに報告者の考えを伝えており、簡潔で分かりやすい実習報告になっている。

最終報告事例 (3) 短期大学部2年Fさん

私は今回の幼稚園実習で、子どもの意欲を高めるために必要なことを学びました。

運動会も終りひとまわり大きくなった子ども達は、竹馬・なわとび等に挑戦していました。長い時間練習する子、すぐ止めてしまう子と様々でした。私はどの子もその子なりに頑張っていると感じていたのも、次の意欲へとつながって欲しいと思い、「頑張ったね!」などとほめていました。そのうち、竹馬をしようとはするのですが、すぐに止めてしまい、練習が持続しないでいました。「どうせできない」と落ち込むKくんを見て、どうにかやる気を持続

させて欲しいと思い「大丈夫!頑張ってるよKくん!もうちょっとやってみよう!」など声かけをしていました。しかし、私の思いは届かなかったのか、Kくんの様子は変わらずでした。その中で、先生とお話する時がありました。先生から「ほめることはとても良いことです。けれど、ただほめてもだめだよ。どこをどう頑張っていたのか具体的にほめてあげることが大切だよ!そして何かできたら一緒にいっぱい喜んであげると良いよ!」という言葉いただきました。私は先生の言葉を聞いた翌日から、「〇歩進めた!すごい!」などと具体的にほめ、出来た瞬間に子どもと共に喜び、頑張っているところを伝えました。そうしているとKくんに変化が表れました。

「がんばるけん見ちゃって!」「今〇歩進めた!」などと少しでも!という気持ちで取り組み、表情も変化があり目に真剣さが見られました。これらのことから、①子どもの気持ちを理解すること。②共感すること。③援助の質を高め、タイミングをはかっていくこと。この3つの大切さを学びました。今回学んだこの3つをこの先もしっかり頭に入れて保育者として一歩ずつ歩いていく決意です。

最終報告事例 (3) 考察

この報告は、子どもの意欲を高めるために試みた援助の経過を、声かけの言葉、先生のアドバイス、子どもが発信した言葉で太い幹をつくっている。

実習生 「頑張ったね!」

(「どうせできない」と落ち込むKくん)

実習生 「大丈夫!頑張ってるよKくん!もうちょっとやってみよう!」

先生 「ほめることはとても良いことです。けれど、ただほめてもだめだよ。どこをどう頑張っていたのか具体的にほめてあげることが大切だよ!そして何かできたら一緒にいっぱい喜んであげると良いよ!」

実習生 「〇歩進めた!すごい!」

子ども 「がんばるけん見ちよって！」
「今〇歩進めた！」

報告者はこの経過をもとに、実習で学んだこととして3点をあげている。いずれも、保育の原点である。保育士として子どもとどう関わったらいかを考え、その結果として言葉で表されたものが、今回の報告の軸になっていると理解したい。ここでは、分かりやすい組み立てという枠組みから、そのひとつ奥の、保育士としての生き方に踏み込んだものと言える。もし、節目に「 」の言葉がなく、単に三つの学びを伝えたとしたら、このような感触は得られないだろう。言葉そのもののもつ力が報告を聞く側の納得度を高めている。

まとめ

情報発信型コミュニケーション能力の育成を目的に行った実践、その一では、パブリックな場面で必要な論理表現の基本、全体から部分への組み立て。その二では、実習報告を例に、テーマを深め具体的に表現することを中心に実践を行い考察した。音声言語に関する教育は、今回の基礎教育としての実践内容から、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションなどの実践を通して多様な場面での情報発信能力の育成に取り組む必要がある一方で、情報収集能力の育成も合わせて進めなければならない。様々な問題を抱え、解決の糸口を掴まなければならない今日の社会状況からも、話の要点を聞き取る力、相手から必要な情報を聞き出す力の育成は、教育現場はもとより、ビジネス社会が必要としている能力である。

音声言語教育は、情報発信能力の研鑽を積む過程で生まれる他者意識が、表現構造を豊かにしていく。実習報告で見られたように、確かなテーマを設定し、その根拠を実習の場面から掘り起こすという表現系の手法を深める中で、子どもと正対する環境が構築される。形の整った情報発信から、対象と自らの生き方を視野に入れた表現を生み出していく。まさに個の教育の

実りすら感じる。若い人をマニュアルで教育する企業には出来ない実践である。情報発信能力を身につけた本物の人材を一人でも多く社会に送り出したいと考える。